

=====

THE VEDANTA KYOKAI

ヴェーダーンタ協会

日本ヴェーダーンタ協会の最新情報

2004年11・12月 第2巻 第9号

<http://www.vedanta.jp/multimedia/pdf/newsletter/index.html>

ニュースレターをご希望でない方はタイトルを停止と書いて返信ください。

=====

目次

- ・ かく語りき 聖人の言葉
- ・ 今月の予定
- ・ 2004年御嶽山リトリート 質疑応答
- ・ 今月の思想
- ・ カナダ、米国への旅（ブラマチャーリ・シュミット寄稿）
- ・ お知らせ
- ・ スワミ、英連邦戦没者追悼礼拝に参加
- ・ 忘れられない物語
- ・ 11月の例会

かく語りき 聖人の言葉

「いいかい、神を欲する者は神と出会うことができるのだよ。自分の人生でそれを確かめてごらん。三日間、ただひたむきにやってみれば、きっと出来る。最も早く神に出会える者は、最も強くひたむきに神だけを追い求める者なのだ。」
シュリ・ラーマクリシュナ

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探みなさい。そうすれば、見つかる。門を叩きなさい。そうすれば、開かれる。」イエス・キリスト

2004年11月12月のの予定

生誕日：

スワミ・スボダーナンダ 11月23日（火）

スワミ・ヴィッギャーナナンダ 11月25日（木）

スワミ・プレマーナンダ 12月20日（月）

協会での催し物：

11月の例会 - 巻末の記事をご覧ください。

12月の例会 - 12月19日(日)午前11時より。皆様のご参加をお待ちしています。
クリスマス・イヴ - 12月24日(金)午後7時より。約一時間、礼拝とイエス・キリストについての講話があります。

2004年御嶽山リトリート 質疑応答

先月号のニューズレターに、2004年御嶽山リトリート(8月6日~9日)の報告(アシシ・グプタ氏寄稿)を掲載し、スワミ・メダサーナンダの講話(「あら探し」に対するホーリーマザーの助言について)の内容をお伝えしました。本号では、講話に続いて行われた、質疑応答の内容をお伝えします。以下の記事も、先月号と同じくアシシ・グプタ氏の寄稿です。

Q: 戦争を始めるなど誤った行為が取られた場合、どうやって「あら」を見過せば良いのでしょうか。

A: これについては明日のセッションで詳しくお話ししたいと思いますので、ここでは「あら探し」の意味だけ確認しておきましょう。「あら探し」とは後ろ向きで非建設的な批判のことを言います。こうした批判はするべきではありません。しかし、前向きで建設的な批判はむしろ歓迎されるべきでしょう。一般に、あら探しはするべきものではありませんが、例外ももちろんあるのです。

Q: 後ろ向きな批判と前向きな批判をどうやって区別すれば良いのでしょうか。批判とは、より良い世界を望むからこそ口にするものではないのでしょうか。

A: それは真実とは言えません。人はそれぞれ異なる感情に突き動かされて行動します。欲や利己心もまた、行為や批判の動機となります。動機が何であるか、他人へどのような影響を与えるか、といったことをよく考える必要があります。

Q: 私たちもホーリーマザーのように、人のあら探しをやめるべきでしょうか。

A: その通りです。ホーリーマザーは、自分以外の人もあら探しをやめるよう導いていらっしゃいました。あら探しは、後ろ向きで非建設的です。しかし、他人の過ちを目にした時にそれを正す手助けをすることは、前向きで建設的です。人を正すには愛と思いやりが必要です。母親が子供の過ちを正したり、教師が生徒の過ちを正すのは良いのです。そういう時には、愛や思いやりがありますから。

Q: こうした考え方は、親や教師という立場で考えれば分かりやすいものですが、仕事においてはどう捉えれば良いのでしょうか。

A: 雇う側と雇われる側の間にも良い人間関係は必要です。教師の場合、生徒への愛情がない者は教師になるべきではありません。雇う側の人間は、たとえ雇われる側から愛されていないくとも、被雇用者に対し愛を注ぐべきです。そしてこのような愛と思いやりがあれば、最終的には状況を改善することが出来るでしょう。良好な人間関係と収益性とは相反するものではありません。その良い例が、インドの巨大企業グループ、Tata財閥です。Tata財閥は従業員の福利厚生のために様々なプログラムを実践しました。政府がそうしたプログラムの実践を規定していたわけではないのにです。同時に、このグループの収益性は非常に高いものでした。

Q： 他人を愛し思いやるとおっしゃいましたが、私たちは俗世間に生き、生来、自己中心的です。他人への愛を育むにはどうしたら良いのですか。

A： この質問には大きな答えが必要ですね。可能な回答はいくつもあります。まず、人道主義者の立場に立って人を愛する方法です。人道主義者の立場とは、私も他人も同じ人間、だから人を愛する、という考え方です。しかし、最良の答えは、霊性主義者の立場で人を愛する方法でしょう。私はアートマンであり、私の中にあるのと同じアートマンがこの全世界を満たしている、という考え方です。ですから、この考え方には人間だけでなく動物も含まれます。また、見返りを期待せずに良いことをするという方法もあります。これはギャーナ・ヨガの見地に立った答えです。さらに、帰依者の見地に立ち、すべての人の中に神を見、全人類を受け入れる方法もあります。ギャーナやバクタは共に、すべての人を愛し、受け入れねばなりません。私たちが自己中心的であるのは当然のことであるとあなたは言いましたが、私にしてみれば、自己中心的であるのはある意味当然ですが、ある意味当然ではないとも言えます。というのは、私たちの真の性質が無限で永遠であるとすれば、有限の存在に見えるのは、マーヤの働きで違う姿が重ねられているためです。ですから、生来、私たちは非利己的なのです。そして、ギャーナ・ヨガの見地からすれば、私たちが自己中心的であるのは当然とは言えません。本当の自分になることこそ霊性ある生活の目的で、そのためにたゆまず努力するのです。

Q： 犯罪に関連のあるニュースは新聞などで読まないようにするべきでしょうか。

A： 犯罪に関するニュースがプラスの効果を生むことは非常に難しいと言えます。そういうニュースからはマイナスの影響を受けるのが普通です。なぜそういうニュースが報道されるのか、新聞社の意図をつかむ必要があります。新聞社の目的は、もちろん利益の追求です。普通の人はこの手のニュースを好みます。だから、犯罪のニュースは詳細まで繰り返し報道されるのです。もし心を浄めて前向きな考えを持ちたいのであれば、こうしたニュースは読まないようにした方が良いでしょう。見出しだけを読み、詳細は読まないのです。

Q： もし会社の上司が良くないことをしていたらどうすれば良いのでしょうか。例えば、会社が環境破壊などの不正行為をしている、といった場合です。

A： 道徳というものがありますね。嘘をつかない、盗みをしない、などの倫理上のルールです。もし人が道徳に反することをしていて、自分はそういうことを決してしていないという確信があれば、それは指摘することが出来ます。しかし、あくまで自分が同じ過ちを犯していないという確信がある場合に限ります。また、周囲への影響も考える必要があります。ある企業が製品を作る過程で環境破壊が生じれば、通常、政府や地域がこうした行為を監視・抑制します。しかし、不正行為が誰にも気付かれずに行われたのであれば、自分が声を上げるべきでしょう。しかし、自分の告発が誰にも相手にされないこともあります。そうなれば、会社を辞めなければならぬかもしれません。ただのあら探しではないのです。辞職も覚悟の上で当局に知らせるべきです。この場合は、他人を思いやっただけです。ですから、あら探しではありません。

Q： あら探しとは違いますが、人からひどいことを言われても影響を受けないようにするにはどうしたら良いのでしょうか。

A： 相手が友人なのか、家族なのか、または職場で言われたのか、など状況によっ

て違いますから、どんな場合にも通用する答えを言うことは出来ません。もちろん、大まかな対処の仕方があります。例えば、相手が友人であれば、あなたの言葉で傷ついたら率直に言えば良いのです。しかし、そこで腹を立てるのは問題です。この、怒りを制御することは、もう一つの重要な課題です。怒りの制御は簡単ではありません。これまで、時間をかけてあら探しについて論じてきましたが、同様に、怒りの制御についても時間をかけて論じる必要があります。しかし、少しだけお話しすると、まずは、すぐに言い返したりしないことです。しばらく時間を置いた方がいいのです。そうすれば、無意識のうちに自然に怒りは収まり、争いは解決します。すぐに反発するような態度を取ったりするとケンカになり、別の問題が生じてしまいます。

時には怒りが静まらず、心の中でくすぶり続けて私たちに影響を与えることがあります。やがて憎しみ、暴力、復讐へと発展することもあります。もちろん心の平和は乱されます。このような心の動きは、どうすれば止められるのでしょうか。知識の道に従って識別することが大変効果的です。こう考えるのです。「私は心ではない。私は心とは別の存在だ。誰が怒りを感じたのか。私は心ではない。褒められて喜び、けなされて腹を立てるのは心の性質だ。だが、私は心ではない。私は常に平和と至福に満ちている存在だ。」こうやって識別する訓練をすれば、怒りを感じてもすぐに、無意識のうちにこの識別心が働きます。ただし、普段から訓練していないと、こうした識別を無意識に行うことは出来ません。

悟りに達した魂の場合、本当に腹を立てることは決してありません。例えば、ブッダはある人から大変ひどい扱いを受けた時も、反抗することはありませんでした。これは、ブッダが石のように感情がなかったからでしょうか。あるいは鈍いところがあったのでしょうか。いいえ。ブッダはこう言っています。「誰かがくれた物を自分が受け取らなかつたら、誰のものになるだろう。」このように、識別をすればいいのです。喜んだり怒ったり振り回されたりするのは誰か。それは心です。私たちは心ではありません。機械的に怒りの感情を押し殺すのではなく、識別という前向きな方法を取るのです。

Q： 信仰を揺るぎないものにするにはどうすれば良いのでしょうか。

A： 霊性の修養を欠かさないことです。もちろん神の恩寵も必要です。

Q： ギャーナ・ヨガとバクティ・ヨガがありますが、心を観察するギャーナ・ヨガは簡単ではありません。神を信じ神にすべてを任せるバクティ・ヨガの方が簡単で実践的です。ですから、バクティ・ヨガの方が優れている。このような理解は正しいと言えますか。

A： 確かにバクティの方が簡単です。しかし、優劣を決めることは出来ません。バクティを実践する時でさえ、ギャーナの発想を活かすことが出来ます。例えば、怒りを制御するための識別があります。スワミ・ヴィヴェーカーナンダはよく「ギャーナ ミッスル バクティ (Jnana Mishr Bhakti・ギャーナとバクティを合わせる)」とおっしゃっていました。つまりバクティが中心ですが、ギャーナの考え方もする、ということです。バクティという基本にギャーナを取り入れることは大変効果的です。ギャーナを取り入れるのはどのくらいか、少なめか多めか、といったことは修養者の能力次第です。ですから、霊的指導者が必要となります。霊的指導者が修養者の能力を分析して適切な助言をしてくれるでしょう。

Q: ラーマクリシュナ・ミッションでは礼拝の仕方が決まっていますか。それともどんな方法で祈っても良いのでしょうか。

A: 僧団ではシュリ・ラーマクリシュナとシュリ・サラダ・デヴィに祈りますが、仏教のお寺に参拝する時はブッダに祈りますし、キリスト教の教会に行けばキリストに祈ります。キリストもブッダもシュリ・ラーマクリシュナも同じ意識の表れですから、そこには何の矛盾もないと僧団では考えています。しかし、毎日の礼拝では祈りの対象を一人に決めることが望ましいでしょう。 (以上)

今月の思想

神にインタビューする夢を見た。

私は尋ねた。「親として、あなたが自分の子供に学ばせたいことは何ですか。」

神は次のようにお答えになった。

「人に自分を愛させることは出来ず、愛してもらうしかないということ。」

「人と自分を比べるのは良くないということ。」

「許せるようになるためには許す練習が必要であるということ。」

「愛する者の深い傷は数秒で広げることが出来るが、その傷を癒すには何年もかかるということ。」

「豊かな人間とは最も多くを持つ者ではなく、最小限のものしか必要としない者であるということ。」

「自分を心から愛してくれる人はいるということ、そして、彼らはその気持ちを表現する方法を知らないだけだということ。」

「同じものを見ても、感じ方は人それぞれだということ。」

「互いを許し合うだけでは充分ではなく、自分自身をも許さねばならないということ。」

私は謹んで言った。「ありがとうございました。他にまだ学ばせたいことはありますか。」

神はほほ笑んでこうおっしゃった。「私がいつも共にいる、ということを忘れずにいて欲しい。」

(Cyberspace より)

「カナダ、米国への旅」

ブラマチャーリ・シュミット寄稿

九月末から十月半ば迄、スワミ・メダサーナンダジとシャンティさん(泉田香穂里さん)はカナダ東部と米国の各地を訪問し、素晴らしい数週間を過ごされました。。

お二人の旅には、ディッペンドゥ・ゴスワーミ博士と、ある有能なドライバーが加わりました。ゴスワーミ博士はこの旅のために大きな車を提供して下さり、ガ

ソリンと食事まで面倒を見て下さいました（しかも、歌と笑いのおまけ付き）。また、ドライバーはたまたま日本ヴェーダーンタ協会の信者の方々と親しくなり、その人たちが大好き、日本が大好きとのことでした。

トロントのヴェーダーンタ協会にスワミ・メダサーナンダジが到着した途端に、礼拝所にいた信者の方々は、高い霊性の持ち主の出現でその場の雰囲気が一変したことを感じ取ったようでした。ちょうど日曜の午後だったので、トロント・ヴェーダーンタ協会のヴィディヤ・マンディール学校では子供向けプログラム（インドの歴史、文化、宗教、価値観などインドのすべてを学ぶプログラム）が行われている最中で、子供たちは、はるばる海を越えてきた聖人と熱心な日本人信者を一見しようと、お二人の周りを取り囲みました。

マハラジの明るく、人を惹きつけてやまないお人柄と、シャンティさんの魂を揺さぶるような声と朗らかな笑い声とに、トロントの信者の方々はすっかり魅了されました。翌日の午前中に行われたマハラジの講話には、なんと六十人以上の人が集まりました。月曜という、週始めの忙しい日であることを考えれば、この数字は驚くべきものです。トロントセンターの責任者であるスワミ・クリパーマヤーナンダの紹介を受け、マハラジは「日本におけるヴェーダーンタ活動」というテーマで楽しく分かりやすいお話をされました。聴衆は皆、講話に聞き入りました。講話の後は、シャンティさんが軽やかな調子の日本語の讃歌を披露して下さいました。お二人とも時差でお疲れのはずなのに、その講話や歌は素晴らしいものでした。礼拝が終わると、お二人を囲み皆でベンガル料理を頂き、日本や霊性の修養についていろいろな話をしました。

長年の信者の多くは、非常に親しくしていた故スワミ・プラマターナンダジ（トロント・センターの創立者・初代責任者）とマハラジが不思議なほど似ていることに大変驚いていました。マハラジの顔つき、優しい物腰や話しぶりは、スワミ・プラマターナンダジの細やかな心遣いや暖かさを彷彿させました。聖なるラマクリシュナ僧団の優れた僧に会い、共に過ごす機会を持てたことはまさに恵みであり、信者の方々は大変喜んでいました。

さらに興味深いことがありました。トロント・センターでの最後の晩、マハラジはアラティで二曲歌を歌われ、そのうちの一曲目は「Dehi Pada Tarani」というベンガル語の歌でした。マハラジがこの歌を歌っている間、信者の方々はまるで雷にでも打たれたかのようにその場にじっと座ったまま身動き一つしませんでした。ある信者は涙が止まらなくなり礼拝所から出て行きました。実は、この歌は、昨年スワミ・プラマターナンダジが、亡くなられるわずか二週間前に歌われたのと同じ歌だったのです。この歌を歌われた時が、人前に出られた最後でした。マハラジはこのことを事前に聞いていらっしやらず、ただこの歌が大変お好きなので歌われただけでした。全身全霊で歌われるマハラジに、皆、スワミ・プラマターナンダジが今なおいらっしやるのを感じました。その場は、魂に語りかけるような、荘厳な雰囲気に包まれました。

トロントを出発後、一行はゴスワミ博士のお宅へと向かいました。博士のお住まいは、かの有名なナイアガラの滝のすぐ近く（カナダ側）にあり、ミニ・ホワイトハウスと呼びたくなる程の素晴らしいお宅で、人付き合いを大切にされる寛大なゴスワミ博士のお人柄を象徴するような建物でした。ここで、博士に、心

のこもった大変暖かいおもてなしを頂きました。また、博士のお宅から皆でナイアグラの滝へ行き、カナダの大自然が織りなす雄大な眺めを楽しむことも出来ました。

博士のお宅で数日楽しく過ごした後は、米国東部沿岸の主要都市のプロヴィデンス、ボストン、ニューヨーク、ワシントンDCを歴訪する長旅です。車に荷物を積み終えると、米国最初の訪問地、プロヴィデンスへ向けて九時間半の旅が始まりました。空は雲に覆われて暗く、雨が降っていました。最初の数時間はゴスワーム博士が運転を買って出てくださいました。博士は、米国入国の際の手強い税関検査官や入国管理官にも臨機応変に落ち着いた対応をして下さり、おかげで難なく国境を通過することが出来ました。

バジャン（讃歌）を聞き、歌い、霊的なことを話し合っ、素晴らしい時間を過ごしているうちに、絵のように美しい都市、ロードアイランド州プロヴィデンスに到着しました。プロヴィデンスのヴェーダーンタ協会は、緑に囲まれた、歴史を感じさせる田舎風の佇まいで、一行を温かく迎えて下さいました。礼拝所は居心地が良く、スワミ・ヨガトマーナンダジの子供のように無邪気なお人柄と信者の皆様の優しいお心遣いのおかげで、四人はこの聖所で我が家のようにくつろぐことが出来ました。

プロヴィデンスでのマハラジの講話スケジュールは、予想を超えるハードさで、まさにうれしい限りでした。プロヴィデンスからボストンは車で一時間程なので、マハラジは日曜の午前十一時にボストンで講話をされ、プロヴィデンスに戻って夕方五時からまた講話をされました。きつい一日となりましたが、マハラジは両センター合計で百七十名を超える方々にエネルギーに講話をされました。ある信者の方は、マハラジがお疲れになればなる程お話がエネルギーで力強くなるとおっしゃっていました。

また、シャンティさんが歌われる日本語の讃歌にも皆、本当に心を惹きつけられました。マハラジがボストンに行ってらっしゃる間、スワミ・ヨガトマーナンダジと親しい信者の方数名がシャンティさんにもっと歌って欲しいとお願いし、シャンティさんは数多くの自作の歌の中から五、六曲を即興で演奏されました。シャンティさんの歌は礼拝室に響き渡り、皆、心穏やかに耳を傾けました。

マサチューセッツ州では、スワミ・ヴィヴェーカーナンダ（スワミジ）ゆかりの聖所を何カ所か訪ねました。スワミジがしばらく滞在されたサラ・ブルの家、スワミジが講演されたハーバード大学の教室、スワミジが初めて人前でお話しされた（シカゴ講演の前）アニスクワム教会、自分の時間を過ごされたアニスクワムのゲストハウス。スワミジがアメリカで行った、ヴェーダーンタについての力強い講演は、今なお訪れる者に大きな霊的波動を感じさせました。こうした場所にいると、神のことだけをひたすら考えるようになり、霊的な向上心が大いに刺激されました。マハラジは学術機関にとりわけ関心を寄せられていましたが、時間の制約上、MIT（マサチューセッツ工科大学）やボストン大学といった、世界的に有名な教育機関はさっと見ることに出来ませんでした。

（続く）

(続き)

ボストンのラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会では、責任者のスワミ・ティヤガーナンダに温かいお持て成しを頂きました。また、スワミ・アカンダーナンダの弟子であるスワミ・サルヴァガターナンダジにもお会いすることが出来ました。スワミ・サルヴァガターナンダジはボストン、プロヴィデンス両センターの前責任者で、現在は引退されています。

ボストンの次は、「ビッグアップル」ことニューヨークです。ニューヨークまでは四時間、天気は快晴でした。皆で何度となく讃歌を歌い、霊的な会話を交わしました。ゴスワーム博士のウィットに富んだお話や叡智の言葉で、車中での時間は大変短く感じられました。

ニューヨークへ入った時の眺めは実に壮大で、息を飲むほどでした。ちょうど夕暮れ時で雲はピンク色に染まり、マンハッタンの摩天楼は母なる天空の間に抱かれ青く冷たい光を放っていました。マンハッタンのアップーウェストサイドへとそのまま入っていくと、歴史的なニューヨーク・ヴェーダーンタ協会に到着しました。1894年、スワミ・ヴィヴェーカーナンダご自身が創立された協会です。

責任者のスワミ・タタガターナンダジは、ベルルのヴィディヤ・マンディールにいらした当時の生徒であったスワミ・メダサーナンダジを見て大変喜ばれました。マハラジも、神のお恵みのこの再会に、同じく大変お喜びでした。

センターでは、スワミ・タタガターナンダジのおそばで毎夜喜びに満ちた時を過ごしました。スワミ・タタガターナンダジは一同の霊性向上への情熱を大いにかき立て、皆の心は崇高なる魂の思想で満たされました。ドライバーもスワミ・タタガターナンダジから最大の祝福を受けました。それは、肩への強烈な一打です。ドライバーが偉大なスワミ・タタガターナンダジの御足に触れようとした時、スワミ・タタガターナンダジがそれを止めようとして右手を伸ばしたためドライバーの肩に強く当たりました。スワミ・タタガターナンダジは大声でおっしゃいました。「こんな風に自分を低めて足に触るのはおやめなさい！さあ、立ち上がって。スワミジのようになりなさい！強くなるのです、スワミジのように！」肩の痛みは数日続き、まさに祝福し続ける祝福でした。スワミ・タタガターナンダジの愛は無限の愛でした。(偶然ですが、筆者の父はベルルのヴィディヤ・マンディールでスワミ・タタガターナンダジの生徒でした。)

このヴェーダーンタ協会から同じくニューヨークにあるラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会へと向かう時は、感慨もひとしおでした。ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会の責任者であるスワミ・アディシュワラーナンダジもマハラジとは非常に親しく、やはりベルルのヴィディヤ・マンディールでマハラジの先生でした。

ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会はちょうど増築を終えたところで、新たな霊的活力の光を放って輝いていました。マハラジは「日本におけるヴェーダーンタ活動」について再び講演されました。磨きのかかったこの講話は(繰り返しお話しする効果は大きいものです)、イーストサイドの信者の方々から大好評を頂きました。講話の内容を少しご紹介しましょう。まず、協会本部がマハラジを日本ヴェーダーンタ協会の責任者に任命した時の、マハラジの最初の感想につい

てです。「ベルルマートの決定とシュリ・ラーマクリシュナの御意志とは当然一致するもの、と必ずしも考えるべきではないと思いました。」この、率直で勇気ある発言に、聴衆からは感嘆や賞賛の声が大きく上がりました。マハラジは急いで次のように付け加えました。「シュリ・ラーマクリシュナの御意志を知るには、ひたすら祈り続けねばなりません。すると最後には直接的、間接的に関わらず、その御意志が示されるのです。」また、マハラジは昔話を披露して下さり、スワミ・アディシュワラーナダジがベルルのヴィディヤ・マンディールでは人望の厚い教師として非常に崇められていたため、生徒の間では「恐れ多い存在」として有名だったと話して下さいました。そして、こう続けられました。「こちらの信者の方々の間で、スワミジが今でも同じように思われているということもあり得ますね。」この言葉に、聴衆の間には温かい笑いがわき起こりました。もちろん、マハラジが単なる冗談だと誰もが分かっていました。シャンティさんも素晴らしい日本語の讃歌を披露され、スワミ・アディシュワラーナダジも信者の皆様も大喜びでした。

一行は、セントラル・パーク、メトロポリタン美術館、ジュリアード音楽学校、リンカーン・センター、自由の女神など、ニューヨークのあちこちを観光しました。さらに数日をニューヨークで過ごし、車は、最後の目的地である、米国の首都・ワシントンDCへと向けて走り出しました。道はすいていて、快適なドライブとなりました。

夕方六時近くになっても車は目的地のはるか手前だったので、マハラジは、走行中の車の中でアラーティを始められました。「Khandana Bhava Bandhana (カーナダナ・パーヴァ・パーナダナ)」「Om Hrim Ritam (シュリ・ラーマクリシュナ讃歌)」「Sarva Mangala Mangalye (聖母讃歌)」を美しく歌われるマハラジに合わせて、皆も心ゆくまで歌い、大変感動的なアラーティとなりました。瞑想が終わりかけた頃、車はちょうどワシントンDCのヴェーダーンタ協会に到着しました。

トロントのセンターと同じく、DCの信者の方々の多くはベンガル人でした。一行を温かく迎えて下さったのは、皆の愛と尊敬を集めているスワミ・アートマーギャーナナダジ(センター常駐)と、人望の厚いスワミ・プランマールパーナダジでした。到着するや否やマハラジは、夕食が出来るまでの間少しでいいから信者の方々と座ってお話しして欲しい、と懇願されました。マハラジはかなりお疲れだったにもかかわらず快諾されました。皆、マハラジの霊的講話に聞き入り、マハラジの明るく快活で人好きのするお人柄にその場は大変明るくなりました。また、シヴァクマール氏が、奥様と息子さんを連れ、現在住まいのあるバージニアから遠路はるばるマハラジに会いにいらっしゃいました。氏は、以前日本に滞在した折、マハラジや日本の協会と大変親しくされていました。

マハラジとシャンティさんだけでなく、豊かなバリトンの持ち主であるゴスワミ博士とドライバーも加わって、いろいろな讃歌を披露しました。信者の皆さんは、大変喜んで下さいました。

DCでも、米国議会、ホワイトハウスなど観光名所を見て回りました。中でも、フランクリン・D・ルーズベルト記念館(第三十二代米国大統領)は印象的でした。大きな石版にルーズベルトの箴言が刻まれていました。スワミ・アートマーギャーナナダジはルーズベルトを尊敬しており、これらの箴言にはヴェーダーンタ

に通じるものがあると力説されていました。

こうして、この美しく至福に満ちた旅は最終日を迎え、一行はワシントン DC からそれぞれの目的地へと向かいました。マハラジはシカゴへと飛び、シャンティさんは日本へ、ゴスワーミ博士はドライバーと共に、ニューヨーク州北部にある、あのリドグリー・マノール（スワミ・ヴィヴェーカーナンダが三ヶ月滞在した）を経由してカナダに戻られました。ラーマクリシュナ僧団の高位の僧に大勢会えたことはもとより、約二週間もの間マハラジと時を共にしたことは、三人にとってこの上なく名誉な体験であり、素晴らしいお恵みでした。母の恩寵により、この旅は忘れることのない思い出となるでしょう。オーム タット サット オーム。

ジャイ タクール

編集者注：

一行にドライバーとして仕え、またこの中身の濃い楽しいレポートを寄稿して下さったのは、ブラマチャーリ・シュミットです。シュミット氏はカナダの敬虔なインド人家庭に育ち、子供たちの英語教師として来日、日本ヴェーダーンタ協会や信者の方々と親しくなりました。やがて氏は、トロント・ヴェーダーンタ協会のブラマチャーリとなりました。

11月の逗子例会では、午後の部でシャンティさんが日本語で書いた旅行記を読んで下さいました。そして、スワミ・メダサーナンダも、ブラマチャーリ・シュミットの原稿にあった出来事について詳しく説明し、さらに、皆が別れた後の出来事についても紹介しました。以下がそれをまとめたものです：

マハラジはワシントン DC に短時間滞在し、飛行機でシカゴへと向かいました。シカゴではモハン・クマール氏と会いました。氏は以前日本の協会の信者でしたが、現在は米国にお住まいです。

クマール氏は、車でマハラジをシカゴからシカゴ・センターのガンジス・リトリートへ、さらにはセントルイスまで送って下さいました。セントルイスのセンターでは、クマール氏も一緒に、長年の責任者であるスワミ・チェーターナーナンダにお会いすることが出来ました。クマール氏は翌朝シカゴに戻られました。マハラジは、ミズーリ川とミシシッピ川の合流地点にも行き、川の水を体にふりかけました。インドでは、川の合流地点は神聖であると考えられています。

マハラジは、セントルイスからは飛行機でシアトルに行きました。二度目の訪問でした。そこで、ウェスタン・ワシントン・ヴェーダーンタ協会の責任者であり、日本の協会の古くからの友人でもあるスワミ・バスカラーナンダジにお会いしました。スワミ・バスカラーナンダジは、何度も訪日されています。マハラジは、このセンターで行われたドゥルガー・プージャにも参加しました。当日は多数の参加者がいたとのことでした。

・ホーリーマザーズハウスの改築の様子を撮影した写真を、協会のホームページに公開中です。URLは<http://www.vedanta.jp/hm/>です。

・マハラジの、カナダ、北米の旅の写真も公開中です。

URLはhttp://www.vedanta.jp/multimedia/photo/canada_usa/index.htmlです。

スワミ、英連邦戦没者追悼礼拝に参加

11月14日(日)、英連邦戦死者墓地(横浜市保土ヶ谷区)イギリス区のCross of Sacrifice(犠牲の十字架)前で、午前10時30分より戦没者追悼礼拝が行われました。この礼拝は、二度の世界大戦を始めとする数々の戦争で亡くなった英連邦の兵士を追悼するための式典です。

今年の式典はオーストラリアの主催で、プロテスタント、カトリック、ヒンズー教、イスラム教、仏教、ユダヤ教の代表者が参列し、短い追悼の辞を述べ祈りと聖歌を捧げました。日本ヴェーダーンタ教会のスワミ・メダサーナンダは、ヒンズー教の代表者として列席しました。11時になると二分間の黙祷を捧げ、英連邦各国の要人、退役軍人、市民らが献花をしました。

墓地用地は、第二次世界大戦の終結と共に結ばれた「日本国における英連邦戦死者墓地に関する協定」に基づき、日本政府が提供したものです。墓地内は、英国、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、インドなどの区域に分けられ、各国の戦没者を慰霊しています。

追悼礼拝は毎年、第一次世界大戦(1918年終結)の終戦記念日である11月11日頃行われています。

忘れられない物語

天国と地獄

ある男が死にました。気がつくと、男は柔らかな光を放つ神殿の中に立っていました。男は思いました。「きれいな所だ。ここはきっと天国だ。俺は、思ったよりいい人間だったんだな。」すると、男の目の前に、光に包まれた生き物が現れました。光る生き物は男に手招きをすると、神殿の廊下を進んでいきました。男が光る生き物について行くと、大きな部屋の前に出ました。そこは、晩餐会を開くのに使う大変豪華な部屋で、部屋の中央には繊細な装飾の施された巨大なテーブルがあり、テーブルの周囲にはずらりとイスが並んでいました。男の他にも人が大勢います。男は皆と共に席に着きました。間もなく、テーブルにはおいしそうなおごちそうをのせた皿がどんどん並べられていきました。「うまそうだ、さあ食べるぞ。」ところが、男がフォークを手にした途端、背後から突然誰かにその手を掴まれ、男は、両腕とも長い棒にひもでグルグルとくくり付けられてしまいました。男は肘を曲げることが出来なくなり、食べ物をフォークに刺してみても

の、口に持ってくる事が出来ません。目の前にはおいしそうながちそうがこんなに並んでいるというのに。

男が辺りを見回すと、他の人も皆同じように両腕を長い棒にくくり付けられ、食べ物に口を運ぶことが出来ていません。皆、口々に不満を言い、自分の身の不幸を嘆いていました。

男は、自分をこの部屋に連れてきた光る生き物の所に行き、こう言いました。「あんなにうまさうながちそうが並んでいるのに一口も食べられないなんて。あそこは地獄だ。頼むから、俺を天国に連れて行ってくれ。」

光る生き物は、男を別の部屋に案内しました。その部屋にも、やはり大きなテーブルがあり、豪華な食事が並んでいます。「よし、今度こそ。」男は急いで席に着くと、フォークを握りごちそうに手を伸ばしました。その瞬間、再び背後から誰かに手を掴まれ、さっきと同じように両腕を長い棒にひもでグルグルとくくり付けられてしまいました。「これじゃ、地獄のときと同じだ。」男ががっかりして嘆いていると、ふと、さっきとは様子が違うことに気付きました。ここでは皆、隣の人に向かって腕を伸ばし、隣同士が互いに食事を食べさせているのです。皆、おいしいごちそうを食べることが出来て、大変幸せそうでした。（日本の昔話）

11月の例会

11月19日の逗子例会・午前の部は、スワミ・メダサーナンダによる「マントラ（オーム）」についての講話でした。以前の講話でジャパ・ヨガを取り上げたことがあります。今回の講話ではマントラの唱え方やその効果について更に掘り下げた説明を行いました。

スワミはまず、『オーム（Aum）』が非常に神聖な音であり、三つの音、三つの文字で出来ていることを説明しました。オームはヒンズー教ゆかりの言葉ですが、今では世界中でよく知られています。ヴェーダのマントラや讃歌の詠唱、礼拝の儀式などでは、オームという言葉をよく耳にします。ヒンズー教のグルや霊的指導者からイニシエーションを受けて授けられるマントラにも、オームという語が入っています。

スワミは「マントラの定義とはどのようなものでしょう。」と尋ね、説明を始めました。サンスクリットでは、マントラは『常に思い浮かべて考えていると、救いと解放を得られる神聖な言葉（mananat trayate iti）』という意味を表します。「では、解放とは何でしょう。それは、繰り返される生と死、輪廻という、すべての苦しみの源からの解放を言います。」生と死がすべての苦しみの源であることは、生きるということを深く分析し理解することで、初めてはっきりと分かるものなのです。「例えば、子供に、『生と死がすべての苦しみの源である』と言っても、分からないでしょう。様々な人生経験を経て、いろんな目に遭って初めて分かることです。」ですから、輪廻からの解放を心から願うようになると、人は、その道を見つけてくれる師を求め始めます。聖典にあるのと同様、師も、聖なる言葉であるマントラを繰り返し唱えるよう助言します。繰り返し唱えることで人

は解放を得、自由になれるのです。

基本的なマントラは二つあります。ヴェーダのマントラと、タントラのマントラです。元々ヴェーダのマントラは、特別な願いを叶えるために、特別な神に生け贄を捧げる祈りの儀式で唱えられていました。やがて、ヒンズー教はヴェーダからプラーナへと形を変えていきました。プラーナでは形のある神々が信仰の対象となりました。さらに、プラーナはタントラへと発展していきました。タントラでは、神を母と見なし、母なる神がこの宇宙を創り、母なる神のお慈悲を頂けばこの世に再び生まれ出る苦しみから解放される、としています。今日、悟りを求めて唱えられるマントラは、タントラのマントラです。このようなタントラのマントラは神秘の言葉であり、方程式のようなもの、種のようなものです。スワミは言いました。「方程式は短く、種は小さい。マントラも非常に短く小さいものです。ほんの数語で出来た言葉です。しかし、方程式を当てはめれば素晴らしい答えが出てくる。種を蒔いて大切に育てれば、大きな木となり花や実をつける。インドに見られる巨大な菩提樹の木も、その種は非常に小さいものです。その小さな種子の中には巨大な木に変化する可能性が秘められているのです。同様に、マントラを唱えると人生は大きく変わり、新たなものを得るのです。純粹さ、献身、他人への愛、叡智。そして遂には自らを悟り神を悟ることが出来るのです。」

マントラは、神か神の化身の名とマントラの『種』から出来ています。マントラの種とはマントラの元になる言葉のことです。マントラの種には様々な種類、様々な組み合わせがあります。オーム、リーム、クリムなどがありますが、これらのマントラの中でもオームが一番重要です。オームには始まりも終わりもありません。オームは永遠です。誰かが発見したものでもありません。宇宙の周期の中で、いつかオームが明らかになる日が来るかもしれませんが、オームそのものは永遠です。「このように、オームは賢人が作り出したものではなく、探し求めた未与えられる啓示なのです。」この周期の中で、オームは初めにヒンズーの賢人らに知られ、その後世界の他の地域に広がり、多少の変化を経て他の宗教に取り入れられたようです。キリスト教では祈りの言葉は『アーメン』で終わります。イスラム教では聖典の言葉を唱えた最後に『アーミン』と言います。これらはどちらもオームを起源としています。このように、オームという音の神聖さ、聖なるバイブレーションはあらゆる宗教に受け継がれているように思えます。

続いて、スワミはオームの成り立ちについて説明しました。オームという語は三つの音、三つの文字で出来ています。サンスクリットの『ア』『ウ』という短音、唇を閉じたまま発音する『マ』の音は、それぞれ英文字の a, u, ma に当たります。アは音が喉で始まるのを、ウは音が喉を通るのを、マは唇を閉じ音が終わるのを表します。つまり、これは全ての音や文字を象徴しているのです。人や動物が発する音は全てこうして作られるのです。ですから、オームはあらゆる文字、あらゆる言語の、まさに共通の起源と言えます。「オームほど豊かで深みのある、バラエティ豊かな象徴はとなっている音や語は、ほぼないと言えるでしょう」とスワミは言いました。

「オームに含まれる三つの音と三つの文字は、意識の三つの状態を表します。実は、私たちの意識の状態には四種類あります。覚醒した状態、夢を見て寝ている状態、夢を見ないで寝ている状態、そして超意識の状態です。この四つの状態はどれも、その状態を通じて知識を得ることが可能です。しかし、第三の段階まで

の知識は相対的な知識にすぎません。第四の段階でしか得られないのが絶対の知識です。第三段階までの状態はそれぞれ『ア』『ウ』『マ』の音に相当し、超意識である第四段階は三音が一つになった、オームという完成した音で表されます。」

「物質にも四つの状態があります。粗大な状態、精妙な状態、原因の状態、そして絶対の状態です。粗い状態は五感を通じて感じる事が出来ます。精妙な状態は五感で直接感じる事は出来ませんが、確かにそこにあるのです。原因の状態はさらに精妙です。しかし、これらの状態をすべて超えた所にあるのが絶対の状態、超越の状態です。第三段階の状態までは有限ですが、第四の段階は永遠で無限です。先程と同様に、『ア』は粗い状態を表し、『ウ』は精妙な状態を、『マ』は原因の状態を表します。そして、三音を一緒に発音したオームは絶対の状態を表します。」

別の例として、スワミは世界も三つあることを挙げました。聖典にもあるように、地、天、そして天と地の間にある世界です。この場合も、『ア』は地を、『ウ』は天地の間の世界を、『マ』は天を表します。

さらに、この三つの音は創造、維持、破壊を表します。どのような周期にせよ、宇宙は創造され、維持され、やがて破壊され消えていくのです。

「この三音は、神の三つの面も表します。『ア』はブラフマ、すなわち創造の神です。『ウ』は維持の神であるヴィシュヌを、『マ』は破壊の神であるシヴァを表します。三音が一緒に発音されると、絶対神、ブラフマン、非人格神を表します。これは興味深いことです。三音が別々に発音されると人格神を表し、一緒に発音された瞬間、非人格神を表すのです。そして、この三音は古代の聖典、リグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、ヤジュール・ヴェーダも表します。」

スワミは、オームの深さと多様性を私たちがより良く理解出来るよう様々な例を挙げ、オームの持つ意味を説明しました。「オームには、病気の治癒や心の平和といった様々な願いを叶える力も秘められています。また、オームを唱えることで霊的な障害を確実に取り除くことも出来ます。オームはあらゆるエネルギーと力の宝庫なのです。世俗的な願いでも霊的な願いでもすべてを叶える事が出来るのです。」

「シュリ・ラーマクリシュナは、『オームは”アナハタ (anahata)”の音だ』と言われました。”アナハタ”とは『作られていない』という意味です。通常、音は何かを叩く、吹くなどして『作られる』わけですが、この”アナハタ”の音とは、絶えず発せられ自然に生まれる音、遮られることのない音を言います。アナハタはブラフマンから生じます。マイクロレベルで、この音はおへそから発せられています。では、この音はいつもあるものなのに、なぜ聞こえないのでしょうか。シュリ・ラーマクリシュナはこう言われています。『非常に純粋な心を持ち、霊性の修養が大変進んだヨギであれば、この音を聞く事が出来る。』」

ここでスワミは、ホーリーマザーの直弟子であるスワミ・シャーンターナンダジにベルル・マートで会った時の話をしてくれました。スワミ・シャーンターナンダジは高齢ですが、オームの音が常に聞こえていて、他の人も聞こえるかどうか、無邪気によく質問されていたそうです。「もちろん、私たちはいつもこう答えて

いました。『いいえ、マハラジ、聞こえません。』スワミは私たちが聞こえないことに心から驚いていらっしゃいました。また、シュリ・ラーマクリシュナは、その音が聞こえるだけでは十分ではない、その音の源であるブラフマンまでたどるのだ、とおっしゃいました。」

オームの重要性のまとめとして、スワミは言いました。「神は最初に、オームの音の力でこの宇宙を創られました。ヒンズーの聖典には、この宇宙は五つの要素で出来ているとあります。土、水、空気、火、そしてエーテルです。神がこの音で最初に創られた要素がアーカーシャ、すなわちエーテルです。キリスト教には、神はロゴス、すなわち言葉でこの宇宙を創造されたとあります。次に、靈性を習得する可能性を秘めたマントラの種として、オームがどのような意味と働きを持つのかを知りました。他のマントラの種はすべてこのオームから派生したものです。そして、オームは、共に使われる語や関連のある語をすべて純粋にする、ブラフマンを表すものです。マントラはオームで始まりオームで終わるべきです。マントラはオームに包まれねばなりません。ウパニシャッドにはオームに関する記述が数多くあり、スワミ・ヴィヴェーカーナンダの好きなカタ・ウパニシャッドでは、すべてのヴェーダで達すべき目的はオームであると述べられています。オームはまさにブラフマンです。この一語こそ至高の語なのです。オームの神の意味を知っている人は、誰であろうとあらゆる願いが叶うでしょう。オームは人間の最大の支えです。ムンダカ・ウパニシャッドには美しいたとえがあります。『オームは弓、アートマンは矢、その的はブラフマン。』、ただ一つのこと心に定めて、このブラフマンを射止めるのです。靈性の修養のすべてが、このたとえに集約されています。」

「では、このオームのマントラを唱えるとどんな効果があるのでしょうか。私たちは、苦しみ的大海を渡り自由になることが出来るのです。オームは『プラーナーバ』とも呼ばれています。プラーは大変良いという意味を、ナーバは船という意味を表します。ですから、解放という向こう岸に渡り着くことの出来る、優秀で素晴らしい船ということですね。オームを唱えていれば世俗的な願望も靈的な願いもすべて叶うのですが、永遠の平和、真の喜び、真の強さ、真の叡智を得られるのは自己の悟りにおいてのみです。」

スワミは講話の終わりに皆を誘導してオームを唱えました。昼食後残った皆さんは、午後の部が始まる前に、改築の完成まであと少しのホーリーマザーズハウスを見に行かれました。

=====

発行：日本ヴェーダータ協会
249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1
Tel: 046-873-0428
Fax : 046-873-0592
Website: <http://www.vedanta.jp>
Email: info@vedanta.jp
[KENB016J]

=====